史跡平野塚穴山古墳現地公開資料　　令和元年６月30日(日)

史跡平野塚穴山古墳の発掘調査の概要について

香芝市教育委員会事務局生涯学習課

１．はじめに

香芝市教育委員会では、史跡整備事業に伴って平成28年度から平成31(令和元)年度まで、４年にわたって発掘調査を進めてきました。これまでの発掘調査の成果は下記の通りです。

２．平野塚穴山古墳周辺の遺跡

奈良盆地北西部、香芝市平野の丘陵南側斜面には、消滅した古墳も合わせて６世紀後半から７世紀にかけて築造された６基の古墳から成る平野古墳群が所在します。古墳群の東端に平野１・２号墳があり、中央部に平野３・４号墳（消滅）、西端に史跡平野塚穴山古墳が築造されています。江戸時代後期の文化４(1807)年の『平野村絵図』には、平野３・４号墳は武烈陵として、史跡平野塚穴山古墳は顕宗陵として描かれています。

平野古墳群の所在する同一丘陵の北方には、６世紀後半の須恵器や７世紀の寺院の瓦を焼成した５基の窯跡で構成される平野窯跡群が分布しています（２基以外は消滅）。また、北東約200mの王寺町との境界南側には、日本最大級の塔心礎や耳環・水晶等の塔跡心礎出土品（奈良県指定文化財・二上山博物館常設展示品）がみつかった７世紀後半の創建とされる史跡尼寺廃寺跡が造営されています。古代に片岡と呼ばれた地域に位置する平野古墳群と尼寺廃寺跡は、６世紀から７世紀代に当地域を勢力基盤とした同一集団が築造・造営したものと考えられており、古墳文化の終焉と仏教文化への移行過程を研究する上で重要な地域として注目されています。

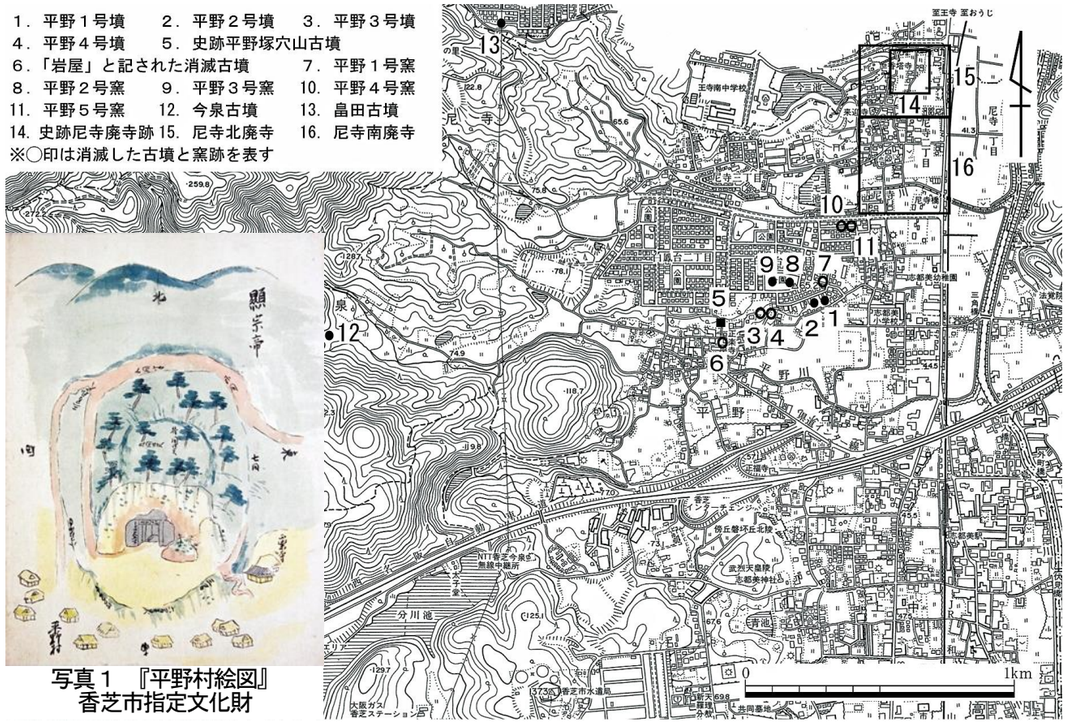


写真１　『平野村絵図』
香芝市指定文化財

図１　平野古墳群の位置図（左下は『平野村絵図』に描かれた史跡平野塚穴山古墳）

３．平野塚穴山古墳の発掘調査

（１）昭和の発掘調査（第１次調査）

昭和47年の乱掘の事後措置として行われた奈良県教育委員会による緊急発掘調査（第１次調査）では、一辺18m、高さ４m前後の方墳で、主体部は、二上山で産出する整美に加工した凝灰岩の切石を組み合わせて造られた横口式石槨（石室）であることが確認されました。石槨は、全長4.47m（玄室長305㎝、玄室幅150.0㎝、高さ176.2㎝、玄門部長56.2㎝、玄門部幅119.2㎝、羨道部長82.0㎝、幅140㎝）であり、基準尺として、１尺30㎝前後の唐尺の使用が推定されることから、７世紀後半の築造と推定されています。石槨からは金環や銅鋺（どうわん）等の破片をはじめ、布を漆で塗り固めた夾紵棺（きょうちょかん）や組紐を漆で塗り固めた漆塗籠棺（うるしぬりかごかん）とよばれる２種類の漆塗棺と推定される漆塗製品の破片が出土しています。古墳時代終末期の貴重な古墳であることから、昭和48年６月18日付で国史跡に指定されました。調査後は、露出していた石槨を保護するため、盛土で覆って保護され、現在に至ります。

（２）平成の史跡整備事業に伴う発掘調査（第２・３・４・５次調査）

古墳の墳丘の四方が近世の土砂採取によって削平されているため、墳丘の遺存状態は悪く、成果は見込めないものと思われましたが、平成23年度に独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所が実施した３次元レーザー地形測量図（研究代表者：廣瀬覚）に基づき、調査を実施したところ、下記のとおり、貴重な成果がありました。

①古墳の墳丘の形状と規模について

古墳の墳丘東側の第４調査区で、幅僅か50㎝たらずですが、横口式石槨の中軸線から東に8.7mの地点で石槨の主軸と平行して、南北方向の墳丘の上段裾と推定される傾斜変換点がみつかりました。３次元レーザー測量図にも、これと一致する傾斜変換点が南北方向に約１m続いていることから、墳丘の上段一辺（下辺）17.4m前後、幅1.8～2.1m程度のテラス面をめぐらした残存高2.7mの方墳であることが推定されます。しかし、これより下位は墳丘の四方が後世に切断されているため、本来の墳丘の規模を発掘調査で確認することはできませんでした。
あえて復元するならば、下段は一辺25～30m前後、高さ約2.7m前後と推定されます。

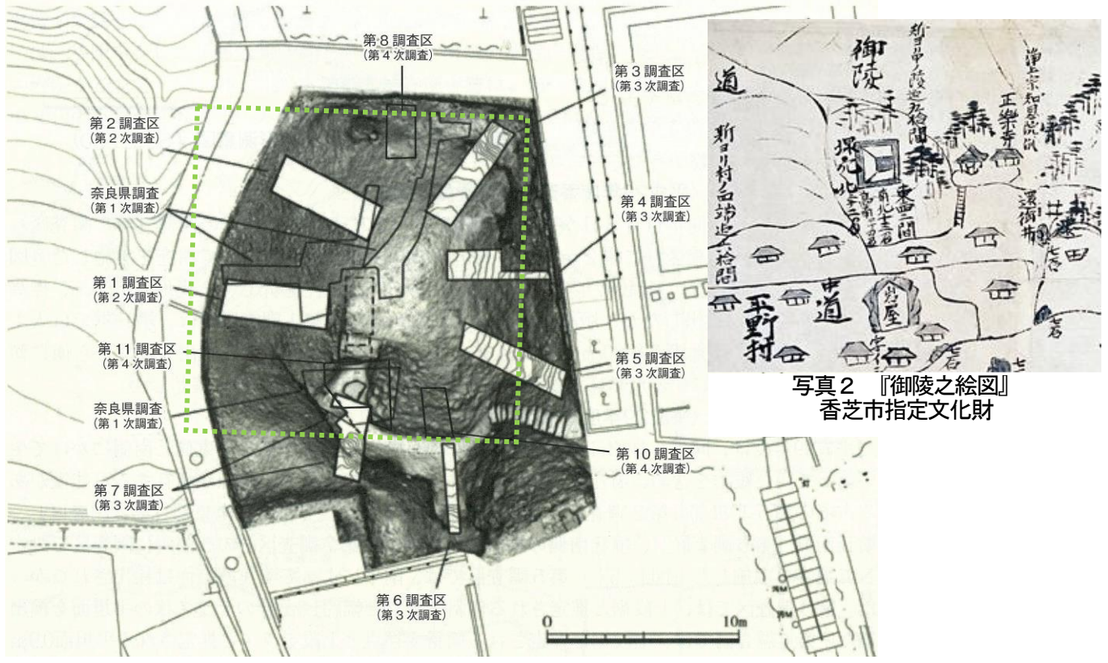


写真２　『御陵之絵図』
香芝市指定文化財

図２　平野塚穴山古墳調査区配置図（左）と『御陵之絵図』に描かれた平野塚穴山古墳（右上）
（平成23年度奈良文化財研究所・株式会社共和作成３次元レーザー地形測量図に合成）

②古墳の墳丘（盛土）の構築方法について

現在、古墳見学用の通路となっている平坦面（本来のテラス面）から墳頂部までの上段は、高さ2.7mにわたって数cmごとに粘質土と砂質土を交互に突き固めて構築する７世紀代の終末期古墳や寺院の基壇の構築技術である「版築」（はんちく）という技法で盛土が行われていることを確認しました。

また、テラス面から下位の下段2.7mも上段の版築よりも、やや間隔が粗い版築で盛土されていることがわかりました。

上述したとおり、墳丘下段の規模は不明ですが、古墳の墳丘正面にあたる箇所では、上下段合わせた墳丘は、飛鳥地域の終末期古墳の高さにに匹敵する5.4m前後になります。

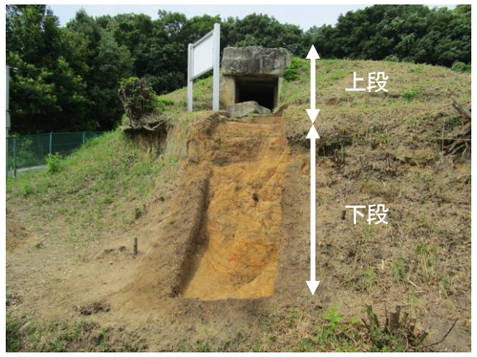


写真３　墳丘上段・下段の版築層

③墳丘の外装（化粧石）について

古墳の墳丘南側斜面に沿って、現位置を保っていませんが、約２m四方にわたって15～30㎝四方の二上山の凝灰岩で作られた貼石と推定される石材がみつかりました。これまでの調査で規格の異なる数種類の凝灰岩の切石が出土していることや版築層上面から凝灰岩の小粒や砕片が分布していることから、少なくとも墳丘斜面前面に凝灰岩の貼石や縁石等の凝灰岩が巡らされていた可能性があります。

７世紀の終末期古墳の墳丘斜面に二上山産の凝灰岩の貼石を貼り巡らす古墳は、明日香村の斉明天皇（舒明天皇の皇后、天智天皇・間人皇女・天武天皇の母、父は茅渟王）の可能性が指摘されている牽牛子塚古墳（けんごしづかこふん）と宮内庁によって天武・持統天皇の陵墓に治定されている野口王墓古墳（天武・持統天皇陵）等の明日香村の王陵級の古墳に限られます。

写真４　古墳の墳丘南側斜面で見つかった貼石とみられる二上山凝灰岩

④石槨（石室）の構築方法について

横口式石槨正面の天井石を支える左右両側石下端の各２箇所で幅12～15㎝、高さ５～８㎝、奥行約10㎝の「梃子穴」（てこあな）がみつかりました。また、天井石左側面の下端からも４箇所で梃子穴がみつかっています。

梃子穴は、石槨を構築する際に凝灰岩の石材を正位置に据え付けることを目的として、石材の設置位置を調整する為にノミ状工具によって穿たれた梃子棒等の作業用工具の挿入用の穴と推測されています。同様の梃子穴は、壁画が描かれた古墳として著名な高松塚古墳（特別史跡）やキトラ古墳（特別史跡）、マルコ山古墳（史跡）等でも確認されており、飛鳥地域の王陵級の古墳の石室と同じ技術系譜を持つ技術者集団によって造られた可能性があります。

平野塚穴山古墳の横口式石槨は、玄室に短い羨道を付けた横穴式石室の名残を止めることから、飛鳥地域の王陵級の古墳の主流となる、石槨を構成する全ての石材を二上山の凝灰岩で構築した初現期の「組合式横口式石槨」である可能性が高くなりました。また、その背景として古墳時代後期に二上山東麓で凝灰岩の組合式家形石棺等の石棺製作に関わってきた石工集団との関係もうかがえます。

★見学ポイント★

申し訳ございませんが、石室の中にお入り頂くことができません。

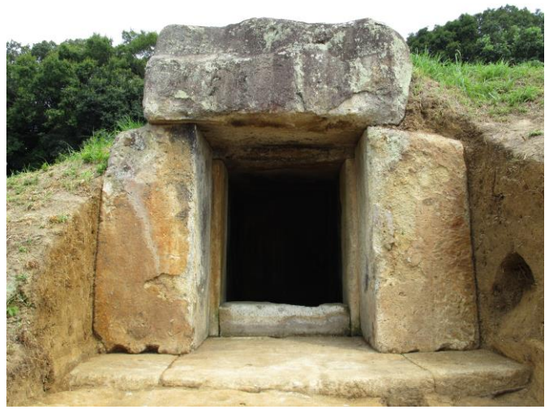


写真５　平野塚穴山古墳横口式石槨の左右側石下端の梃子穴（右上・右下）と天井石左側面下端の梃子穴

４．出土遺物

古墳の築造時期を示す遺物は出土しませんでしたが、古墳に伴う遺物として、多数の二上山凝灰岩の細片が出土しています。注目される遺物として、僅か１～３㎝の細片ですが、昭和の第１次調査と同様に「漆塗籠棺」の破片約20点が出土しています。

５．まとめ

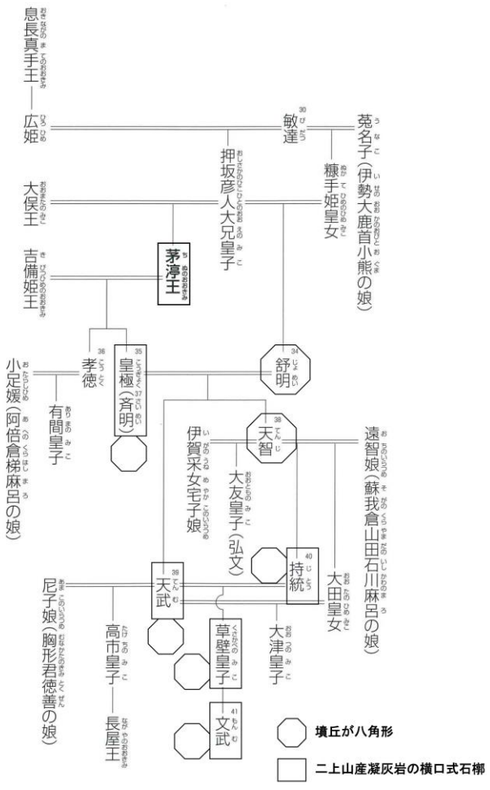
平野塚穴山古墳は、第１次調査で出土した「夾紵棺」や「漆塗籠棺」、石槨の規模等から王族級の高位の被葬者の古墳であることが推察されてきましたが、今回の発掘調査で石槨構築時の梃子穴をはじめ、墳丘外装の二上山凝灰岩の化粧石等の飛鳥地域の王陵や王族級の古墳と共通する墳墓を構築する技術や諸要素が確認されたことから、古墳の被葬者は、王に極めて近い、王族の古墳である可能性が高くなりました。

墓誌等が出土しない限り古墳の被葬者を追求することは難しいですが、『延喜式』（諸陵寮）に記された「片岡葦田墓　茅渟王」の記述やこれまでの考古学的知見から、平野塚穴山古墳の被葬者は、塚口義信氏（堺女子短期大学名誉教授・名誉学長）が指摘する通り、皇極・斉明天皇（女帝）、孝徳天皇の父で、天智天皇や天武天皇の祖父にあたる茅渟王（ちぬおう）の可能性が高くなりました。

平野古墳群の北方200mに所在する史跡尼寺廃寺跡も茅渟王一族が造営した寺院跡である可能性が高く、７世紀代に飛鳥地域に匹敵する終末期古墳と古代寺院が併存する地域は奈良県内でも本市以外に類例はありません。須恵器を焼成した平野窯跡群も併せて、古代に片岡と称された当地域一帯には、７世紀に敏達天皇（びたつてんのう）からはじまる茅渟王一族の経済基盤や勢力基盤があったことが推察されます。

（※史跡平野塚穴山古墳の調査成果の一部は、香芝市二上山博物館平成30年度特別展図録『二上山麓と三輪山麓の考古学』2018にまとめています。二上山博物館受付にて一冊800円で販売中です。）

表２　７世紀前後の大王家系図



※天武・持統陵の石槨は凝灰岩以外とする説があります